

3 人の解放を歓迎し、自衛隊・全占領軍の撤退を求める

4月15日、日本人3人はバグダッドで解放された。われわれは3人の解放を歓迎するとともに、自衛隊・全占領軍のイラクからの撤退を強く求めるものである。

3人が人質となったのは、日本政府が自衛隊を派兵し、占領軍の一翼を担い、イラク民衆に敵対したからであった。日本政府は当初から「自衛隊を撤退せず」と明言し、3人を見捨ててきた。小泉首相は拘束したグループを「テロリスト」と呼び、川口外相は「自衛隊の貢献」をわざわざ言い、解放を遅らせてきた。

3人の解放をもたらしたのは、3人の命を守り、自衛隊撤退を要求する日本民衆の行動であった。自国民を平然と見捨てようとする小泉の姿に、日本市民の多くが、自衛隊派遣の本質が人道支援ではなく占領軍の一翼として居座り続けるところにあることを見抜いたのである。首相官邸前の抗議行動では日に日に撤退を求める声が大きくなり、署名はあっという間に15万名を超えた。このような行動が、政府とは違い日本市民がイラク民衆と連帯しようとしていることを全世界に知らせ、解放をもたらしたのである。

マスメディアや政府は、3人が退避勧告を振り切り危険を覚悟で出かける以上「自己責任だ」と総括しようとしている。今後とも見捨てるといっているのである。現在さらに2人が行方不明となっているが、このような政府・マスメディアの態度を許さず、自衛隊撤退こそが基本的解決策であることを確認しなければならない。

3人は解放されたが、イラク民衆は占領軍による無差別虐殺攻撃を受け続けている。ファルージャでは米軍の包囲の下、無差別攻撃が行われ700人以上が殺害されている。その中には多くの子どもがいた。白旗を持った老婦人が殺され、負傷者を乗せた救急車が攻撃された（イラク占領監視センター）。現在、一時的停戦が行われているが、直ちに米軍による虐殺をやめさせねばならない。

占領軍参加各国はイラク民衆のレジスタンスに激しく動揺し、撤退を検討し始めている。イラク民衆のレジスタンスに連帯し、世界の平和運動とともにさらに自衛隊撤退、全占領軍撤退に追い込んでいかねばならない。これが3人の解放で応えたイラク民衆に対するわれわれの責務である。全占領軍を撤退させ、戦争屋ブッシュ、ブレア、小泉を世界から追放しよう。

2004年4月16日 民主主義的社会主义運動（MDS）